

継承として、行政機能の集中を新たに獲得することができた。

福島県会津高田町の農業

— 特に薬用人参について —

鈴木 勢津子

会津高田町は福島県大沼郡の東部に位置し、地形は全般的に山がちであるが、町の北東部には会津盆地の一部を成す宮川扇状地が広がっており、肥沃な水田地帯を形成している。このため、耕地の殆どは会津盆地上にあり、稲作中心の農業が行なわれている。ここでは肥沃な土壌や夏季の高温によって水稲の反当収量が多いが、多雪地帯であるため、裏作は殆ど行なわれず、水田単作農業の傾向が強い。

宮川扇状地の南西端に耕地をもつ永井野地区では傾斜地が多いため、水田率が比較的 low、果樹、工芸作物類の栽培面積の比率が大きくなっている。永井野地区は会津高田町の中でも薬用人参の栽培が最も盛んな地域であるが、その中心地は会津みしらず柿の量産地でもあり、ここでは稲作と薬用人参及びみしらず柿栽培によって農業経営を行なっている農家が多い。

薬用人参は、栽培農家数や収穫面積が非常に少ないので、町全体の農業における地位が低く、農業生産の上で特に重要な作物であるとは言えず、栽培地域としての特色も殆ど見られないが、栽培農家に限って見れば、経営形態などに特色があり、反当収入が多く、まとまった収入が得られることから、農業所得に占める割合が比較的高く、主要作物のひとつとなっている場合が多い。しかし、価格の変動が激しく、不安定な作物であるため、薬用人参の単一経営ということはまず考えられない。また、現在の栽培農家の多くは栽培歴が長く、ある程度の伝統をもつ農家であり、最近になって栽培を始めたというような例は殆どない。

この地域では薬用人参栽培に伴い、薬用人参の加工も古くから行なわれ、農家の副業として発展してきた。加工の仕事は薬用人参収穫後の非常に短い間しか行なえないので、専業にすることはできないが、この時期がちょうど農閑期に当たるため、農家の副業としては手ごろな仕事といえる。しかし、現在では人参農協の力が大きく、また、栽培もそれほど盛んではないので、薬用人参加工業はあまり盛況をみなくなり、業者の数も激減してきている。

千葉県八街町の農業地理学的考察

高崎 祐子

本論文は首都圏における一畑作地域を取り上げ、そこに展開した農業について考察することを通して広く今日における農業の実態とその問題点を考えてみようとしたものである。

対象地域としての八街町は東京から約 50 Km の距離にあり、千葉県北部に広がる下総台地のほぼ中

央部を占めている。この下総台地地域は千葉県の中でも水田の少ない地帯であるが、とりわけ八街町は水田率が7%にすぎず、その意味で典型的な畑作地域として位置づけられる。しかも、そこには約4,000 ha に上る広大な畑が広がっている。

八街町の畑作農業においては、まず専業農家率が高く、経営耕地規模が大きいという特色がきわだっている。一方、農作物については従来からここは落花生の特産地として知られている。しかし、昭和40年前後を境として落花生から野菜への転換がはかられ、現在では野菜の特産地となるに至っている。また、畜産についても順調なびが見られ、中でも酪農と養鶏においてはすでに多頭化が進んで現在では経営がほとんど専業化あるいは企業化している。

さらに町の内部については開発の歴史の上から大きく二つに分けることができる。それは明治時代初期に初めて開墾された八街地区とそれに対して歴史が古く、合併以前は別個の村だった川上地区である。八街町における水田はこのうちほとんど後者に集中している。そして、その川上地区は全体として八街地区の典型的な畑作地域にくらべて経営耕地規模および農業生産性などの点で劣っており、その意味で農業的に町の中の後進地域である。

以上のように農業上の諸要素について他市町村との比較を含めながら考察すると、八街町は農業的に非常に豊かなものを持っていることがわかる。ただし、野菜産地としての歴史ははまだ浅く、その地位を確立するにはなお数年を要するものと考えられる。また、総じて八街町の農業は東京からの距離に比して畜産を除いて集約化が立ちおけている。農業ばかりでなく町全体の都市化も今日に至るまであまり進んでいない。しかし、裏を返せばこのことによって八街町の農業はその特色を保ってきたとも言える。このようなことから、今後の農業の発展を願うとき、この地域がいたずらに都市化の波に翻弄されることがないようにということが強く望まれるのである。

琵琶湖西南岸地域の地誌的研究

山田 智子

調査地域は、琵琶湖西南岸地域で、行政的には大津市北部および志賀町南部にあたる。私は琵琶湖と沿岸住民との関係を、琵琶湖の利用を通してとらえたいと思い、昔から漁業と湖上交通の中心地であったこの地域を調査地域に選んだ。

第一章「地域の概観」では、位置・沿革・人口などを後章を理解する助けとなるよう記した。この地域は、京都に近い（京都から約20Km）、早くから開発されてきたが、昭和49年に湖西線が開通し、京都に20～30分で行けるようになったため、今後京都の影響を一層強くうけるようになるであろう。

第二章「自然」では、琵琶湖の概況、気候、植生、地形、地質をとりあげた。気候は、瀬戸内型気候に近い気候であり、温和である。植生は、大部分常緑樹を下生えとするアカマツ林である。地形は、滋賀丘陵が湖岸にせまっており、湖岸にはデルタが発達し、水系にも比較的めぐまれている。滋賀丘陵は琵琶湖の生成を知るのに重要である古琵琶湖層群から成っている。